

# 同音語をめぐって

田 中 章 夫

## I

「同音語は、マギレヤスイ」と言う。しかし、どんな現象を「マギレタ」と認めるのか。また、どんな同音語がまぎれやすいのか。そして、われわれは、それを、いかにして見分けているか。同音語の問題としては、もっとも基本的なことからでありながら、こうした点についての説明は、あまり見られなかったようである。

まず、どんな現象を「同音語がマギレタ現象」と認めるのか、これひとつでも、なかなかやっかいな問題だが、つぎのようなケースを考えてみよう。

A1 久しぶりに帰郷したら、兄が「息子をシリツの高校に入れた」と話した。これでは、「私立」だか「市立」だかわからないので、「ワタクシリツかい、それとも、イチリツかい」と聞き返したら、「市立」だった。

A2 ラジオを聞いていたら、「メイユ一尾上菊五郎」という一節が耳にはいぢ。最初「盟友」を思い出したが、「菊五郎」と来たので、ああ「名優」だなど気がついた。

A3 「午後からコーエンに行きます」と言われたとき、はじめは

「公園」を思いついたが、相手が学者先生だったので、すぐ「講演」だなどわかった。

以上の三つのケースは、いずれも、聞き手が、同音語のセットを思いついたという点で共通している。A1の場合は、聞き手が、すぐに、「私立/市立」というセットを思いついたために、誤解が避けられたものであり、A2の場合は、「盟友/名優」のセットの中から、話線(文脈)に現われた判別の手がかり(菊五郎)によって、了解点にたどりついたものである。また、A3の場合は、「公園/講演」のセットの中から、話の場面(こまかく言えば「相手」)によって、選択をおこなった例である。しかし、このA1の場合も、A2の場合も、またA3の場合も、理解のプロセスにおいて、一瞬の「乱れ」が存在する。それは言うまでもなく、圈点の部分である。こうした「乱れ」は、何によって生じたか、と言えば、それは、もちろん、同音語の存在によって生じたわけである。これら、三つのケースでは、最終的には、まちがいに伝達が生じている。しかし、伝達の過程において、同音語の存在が、ちよつと、さまざまに違ったケースだと言うことができよう。

いまあげたA1・A2・A3のケースにおいて、もし、聞き手が

手がかりにぜんぜん気づかず不用意に受け取ったとしたらA1・A2・A3のケースは、それぞれ、つぎのように変容する。

B1 「息子を私立高校に入れた」と理解する。

B2 「盟友・尾上菊五郎」と理解する。

B3 「午後から公園に行きます」と理解する。

したがって、完全な誤解におちいってしまったことになる。

さて、ここで、聞き手が、もし、話し手の意図した語を、まったく知らなかった。そして、不幸にも、それと同音の語は知っていたという場合を想定してみよう。すると、その場合も、結果的には、B1・B2・B3と同じような理解にたどりつくことがありうるわけである。すなわち

C1 「市立」を知らず、「私立」を知っていた。→「むすこを私立高校に入れた」

C2 「名優」を知らず、「盟友」を知っていた。→「盟友・尾上菊五郎」

C3 「講演」を知らず、「公園」を知っていた。→「午後から公園に行きます」

このC1・C2・C3のケースは、結果的には、B1・B2・B3と同様な理解内容かもしれないが、「語を知らなかった」という要素は、重視すべきである。ある人は、この点を、とりあげて、「これは、語を知らないための混乱であって、同音語が、まぎれた現象ではない」と主張するかもしれない。しかし、こうした誤まった理解が成立した原因は、やはり、同音語の存在にあるわけである。したがって、これも、同音語がもたらす、コミュニケーションの混乱の一種と考えないわけにはいかない。

(例) アナウンサーが「巨人・阪神、ショーサ5ゲーム」と言っていたので、「5ゲームも離れては、少差」とは言えないね」と言ったら、みんなに笑われた。「勝差」なんてことばは、ぜんぜん知らなかった。

われわれは、自分の知らないことばを聞くと、それと同音の、自分の知っていることばに結びつけて理解しようとする。ここに同音語をめぐる、一つの深刻な問題がうかびあがってくるのである。

## II

いま、話し手が伝えようとした語をP、それと同音の語をP'とし、PとP'のあいだには、無視できないほど大きな「意味の違い」があったとしよう。

そこで、もし、聞き手の頭の中にPしか存在しなかったら——これは同音語によるコミュニケーションの混乱は、まったく生じないわけである。その逆の場合、すなわちP'しか存在しなかった場合、これが、さきに述べたC1・C2・C3のケースである。

	[話し手の意図]	[聞き手の理解過程]	[結果]
A	(P) → (P・P')	(何らかの手がかりで) ↓ P	正解
B	(P) → (P・P')	(手がかりに気づかずに) ↓ P'	誤解
C	(P) → (P')	(Pの存在を知らずに) ↓ P'	誤解

A1・A2・A3とB1・B2・B3のケースは、ともに、P・P'の両方が、聞き手の頭の中に存在していたものである。こうした観点から「同音語のマキレタ現象」を分類すると、右のようになる。

そして、「同音語の判別」とはなにか、というところ、「すくなくとも、Aのケースに到達すること」である。

ひとくちに「同音語がマガレル」現象とは言っても、この三種のケースは区別すべきであり、また、同音語の混乱とか判別とかいう問題を採りあげるときにも、この点を認識しなくてはならないと、わたしは考える。

以上のように考えてみると、同音語判別のもっとも基本的な条件は、「Pすなわち、話し手の意図した語が、聞き手の理解語彙の範囲内に存在していること」と、「何らかの判別の手がかかりをつかむこと、あるいは、つかませること」とである。では、その判別の手がかかりには、どんなものがあるか、つぎに、それについて考えてみよう。

### III

同音語が存在すれば、かならず、マガレル可能性はある。辞書の見出しのように、かな書き一語単位でランダムに書き並べられた同音語が判別できるかどうか考えてみれば、すぐわかることである。

しかし、それも、ひとたび声を出して読みあげてくれたら、そこに、アクセントで判別しうる可能性が生じる。

アクセントは、もっとも基本的な、同音語判別の手がかかりである。

「国会の審議を、チューシする」

「シェークスピア悲劇のヤクシャとして有名な人」

などの場合には、アクセントで簡単に「中止か注視か」「訳者か役者か」が、わかる。「各界の第一人者／角界の第一人者」「工学のために／後学のために」なども同様である。

しかし、残念なことに、アクセントの異なる同音語というものは、そう多くない。この点について、宮地裕氏は、つぎのような調査をしている。

「国研報告20「同音語の研究」のリスト（同音語表）一五四総ページのうち、一〇ページおきに、ページの左半分を調べた範囲では、同音語四一七組のうち、異なるアクセントの語を全く含まないものが、二六九組におよぶ。また、同じ四一七組のうち、アクセントによって、その組に属する語が区別されているものは、二語一組のものばかりで二六組にすぎない。つまり、アクセントによる同音語の「言い分け」は、決して多くはない、むしろ、非常にすくないと言えそうである。（イントネーション論のために）国語国文・三二七号・三ページ）

一方、国研第一資料研究室の資料によると、総数七八〇三セットの同音語の中から、主観的に選び出された「まぎれやすそうな同音語」三四二四セットのうち、アクセントの異なるものは、わずかに一七六セットである。こうした結果の最大の原因は、「まぎれやすそうな同音語」の多くが字音語（漢語）であるのに、字音語のアクセントにバラエティーがないからであると考えてよさそうに思う。

したがって、アクセントは、もっとも基本的な判別の手がかかりであるが、決して有力な手がかかりではない（注1）。

アクセントに関連して、これも話しことばに生かされる同音語判別条件に「発音の切れ目」がある。たとえば「貴工場」は「キ、コージョー」となって「機構上」とは区別される可能性がある。「各、実験」と「核実験」、「全、楽器」と「前学期」なども同様である。

しかし、これは、個人々々の一語意識と密接に関係するものだから、もちろん、それほど有力な手がかりにはなりえない。が、あくセントと共に、話しことばのみに生きる判別の手がかりとして注目すべきものである。

さて、つぎは、慣用句的な用法や、語の複合形式である。たとえば、「くにカンシンを持つ」「くのカンシンを買う」のような形で出てくれば、「関心」「歓心」は区別できるし、「感心」「寒心」などとまぎれることもない。また「セイネン式」「キカイ均等」の「成年」「機会」も、この形なら「青年・盛年・生年」「機械・器械・貴会・奇怪」などとまぎれることはない。「セイコー東低」の「西高」と「セイコー雨読」の「晴耕」とがまぎれるとは思えない。しかし、「まぎれることがない」というのは、あくまでも、相手が、こうした慣用的な用法なり、複合語形なりを知っていること、また、話し手が、こうした慣用を無視しないことを前提としての話である。

政防法デモのこと。一見「装甲車」フウの「広報車」のマイクから「氣勢をあげてはいけません。氣勢をあげないでください」これはよくわかったのだが、そのつぎにいわく「キセイを発するとあとで責任者が逮捕されることがあります。キセイをやめなさい」(「言語生活」二〇号)「耳」欄)

「氣勢」が「氣勢をやる」「氣勢をやめなさい」の形で使われている。「奇声/氣勢」を区別することが、できなくなってしまう。近年、特に若い層では、こうした言語的な習慣が乱れがちなることが、しばしば指摘されている。国研報告20「同音語の研究」における大学生・高校生を対象としたテストの結果でも、「カンショ」にひたる「

「輸出シンコー策」などの形で、「感傷/鑑賞/干渉」「振興/進行/新興」の同音語を見分けることは、他の手がかりにくらべて、それほど有力なものではないようである(同書、VI・3)。

これと、もうひとつ。このテストにおいて、「コーシユに精彩がない」「4FBフジン」の形によって「攻守/好守/好手」「布陣/夫人/婦人」などから「攻守」「布陣」を選ばせることを試みた。このテスト結果によると「攻守に精彩がない」とか「4FB布陣」とかの形は、一方のグループには、きわめて有力な手がかりになる反面、他方のグループ(スポーツに興味のない人びと)にとってはまったく無力であった。すなわち、このような慣用的な用法や複合語形の習得には、かなりの個人差があるという点である。「シキュー式(始球)」「シキューを喫する(死球)」「シキューに浴する(四球)」が、手がかりになるかどうかは、個人個人で異なる。そして、これは、もう言語的な問題をはなれてくる。

それでは、こんどは、これはまた、あまりに言語的な問題——品詞性について考えてみよう。品詞の違い、たとえば「危険(名・形動)/乗権(名・サ変)」「強行(名・サ変)/強硬(名・形動)」などは、サ変動詞形か形容動詞形で使われれば、有力な判別の手がかりになりそうである。事実、国研報告20「同音語の研究」のテストでも、慣用的用法や複合語形よりは、かなり良い結果を示した(同書・VI・3)。

このテストでは、問題にならなかったが、しかし、実際には「キョーコーする」には「強攻する」もありうるし、「キケンする」には、「帰県する」もないことはない。このように整理してみると、品詞だけで、完全に混同が防げるような同音語セットは、そう多く

ない。

そのうえ、字音語の品詞性が、和語の場合ほど安定しにくいということも、判別条件としては、ひとつの弱点である。「鬪鶏」「統計」にサ変動詞形があるかどうか、「二重」「三重」が、形容動詞形によって「二十」「三十」と区別できるか否かは、人によって答えが、まちまちになってくるように思う。

以上見わたしてきたように、それぞれ限界はあるかもしれないが、ともかく、アクセントも、慣用的な用法や複合語形も、また品詞の違いも、同音語判別の手がかりにはなりうる、したがって、こうした条件をそなえている同音語のほうが、すくなくとも、そなえていない同音語よりはまぎれにくからう———というところ、いかにも常識的だが、これは、同音語というものに手をつける時の出発点として、どうしても無視しえないことがらである。

注1 アクセントは、同音語混同の一因にもなるということ。全文かな書きの文章を読む機会の多い人びとの間では、すでに常識かもしれないが、テレ・タイプ、カナ・タイプで書かれた資料を読んでいた時のことである。われわれは、しばしば、最初に読んだ時のアクセントにまよわされてしまつて同音語の混同、ないしは誤解におちいった。かな書きの語を読みとるさいには、アクセントに吟味する必要がある。

#### IV

ところで、同音語集とか、同音語表とかいうものを眺めている

と、アクセントだの、品詞性だの、そんなものまで考えなくても、「なんだか、これとこれとはまぎれやすそうだ」とか、「こいつとこいつは、まず、まぎれまい」とか、いった感じがする。こういう感じのよりどころを分析すると、おもなところは、ほぼつぎのようなものらしい。

1 よく使うことば同士同音語はまぎれやすい。そうでないものはまぎれにくい。

2 同じような方面のことば同士同音語はまぎれやすい。かけはなれた方面のものなら、まぎれにくい。

3 意味が近い同音語はまぎれやすい。意味がかけはなれていれば、まぎれにくい。

どれも、いかにも、もつともである。

さて、これを、一般的な問題として考えると、第一番目の「よく使うことば」というものは、使用率によつて、一応、きめていくことができよう。「夫人・婦人・布陣・不仁・不尽……」を例にとると、国研報告二「現代雑誌九十種の用字用語」の「使用率表(全体)」によれば、「夫人(使用率〇・二六九%・使用率順位四六二)」「婦人(使用率〇・二六四%・使用率順位四七四)」で、他は使用率〇・一六%・順位六八四三 までには見られない。したがつて、この中では、「夫人」「婦人」の使用率は、「布陣・不仁・不尽」などよりは高いと推定される。そこで、もし、使用率の高い語どうしの同音語、すなわち、よく使う語どうしの同音語はまぎれやすいという前提にたつならば、この同音語セットの中では「夫人・婦人」の組合わせが、ほかの組合わせよりもまぎれやすいということにな

る。事実、国研報告二「現代雑誌九十種の用字用語」の第二表（全体）には、「科学・化学」「工業・鉱業・興行」「教会・協会」など、まぎれやすい同音語として、しばしば引き合いに出されるものが、数多く含まれている（注2）。

こんどは逆に、「あまり使われないことば」すなわち「使用率の低いことば」というのは、どんな語かというのと、すぐに思いつくのは、古めかしい語とか、特殊な専門語とかいったものであろう。こうした語を含むセットが、はたして、まぎれにくいかどうか。

種々な調査を試みた結果では、このような「使用率の低い、なじみのないことば」の場合には、かなり有力と思われる判別の手がかりを与えてみても、それが、まったく作用せず、「使用率の高い、なじみのある同音語」にまぎれてしまいやすいようだ。国研報告二〇「同音語の研究」において実施した、高校生一四三人を対象とする予備テストには、つぎのように、高校生程度には、あまりなじみのなさなことばを、いくつか出題してみた。

「青少年の補導・キョーカ・育成について対策を協議する」（教化）

「両国間の戦争状態は、法律上は講和条約ハッコー期間まで継続している」（効効）

「海運業界は、今年度のシンセン建造計画を注目している」（新船）

この結果は、いずれも、他の同音語の判別結果にくらべていちじるしく低く、正しく判別できた答えは、四〇％未満であった。

これは、われわれでも同様である。朝日新聞から資料として提供されたテレ・タイプニュース原稿について、「実用上の文章におい

て、どのような同音語が、いちばん判別がむずかしいか考えたところでは、問題は、やはり、つぎのように、なじみのない語の場合であった。

「潜航中でも、ディーゼル・エンジンを運転するキューハイキ」（吸排器）

「ハロゲン元素の量でガンシヨウの状態がわかる」（岩漿）

「切手の絵が、コーガク的にまちがっている」（光学）

など、いずれも、よく考えれば、判別の手がかりがないわけではない。にもかかわらず「吸排器」を「朽摩機・休摩器」、「岩漿」を「岩礁・岩床」、「光学」を「工学・鉱学」とやっつけてしまふ。

こうしたことから、なじみのうすいことばや自分の知らないことばの場合には、それと同音のなじみの深いことばに、無理にでも結びつけて理解しようとする傾向が著しいことがわかる。この結果、（Ⅱ）で述べた、Cのケースすなわち「Pの存在を知らずに、あるいはPに気づかずに、P'に誤解するケース」が生じるわけである。そして、その可能性も、なじみがうすいことばほど大きい。

したがって、このケースまで考えに入れるならば、まぎれやすさが、その語の使用率に左右されるとは考えられないようである。

もちろん、A・Bのケースだけについて考えれば、使用率の高いことは同士の同音語セットはまぎれやすいことは言うまでもない。

つぎに第二番目「同じような方面のことば同士の同音語はまぎれやすい」という問題。たとえば、「学会／学界」「議員／議院」などは、全く方面の異なる「農学／能楽」「史料／試料」などよりもまぎれやすいと感じる点である。野球の「始球・四球・死球」はまぎれるかもしれないが、「子宮」とはまぎれにくいとか、「音楽」

の「輪唱」と医者「臨床」とがまぎれることはなからうといったことにもなる。これは、たしかに、その通りであろう。国研報告二〇のテストでも、「議院・議員」の判別結果（四一・五％）が、他の一般の同音語の判別結果（六四・八％）にくらべて、著しく低かったのも、この原因からと考えられる。処理を要する同音語として、「言いかえ」などの対象になるもの多くが、この種のものであることから、こうした同音語の判別の困難さがうかがわれる。

第三番目に挙げた「意味の近いものは、まぎれやすい」という点に移ると、これは、言うまでもなく「帰郷と帰京」は、まぎれやすいが、「奇矯」や「桔梗」とはまぎれにくいという類である。「帰港・帰航・寄港・寄航」はまぎれやすからうが、これらが「気候」や「奇行」とまぎれることはあるまいなどと憶測を働かせることができる。

これを、もうすこし確実に進めるためには、意味による語彙分類表が役立つ。一例として、国研報告二二「総合雑誌の語彙調査（後編）」の語彙分類表で、同じ分類目に属する同音語を拾うと「夫人／婦人」「体制／態勢」「同士／同志」「保証／保障」「勢力／精力」など、いかにも、まぎれやすそうなものが出てくる。これに反して、「生涯／障害」「進行／信仰／新興」「先生／専制」など、前の例にくらべて、比較的まぎれにくそうなものは、ほとんどすべて分類目を異にしている。

意味が近いということは、たしかに、まぎれやすさを生み出す一つの条件に違いない。しかし、一方から考えれば、意味の近い同音語「夫人／婦人」「体制／態勢」「同士／同志」なんかは、たとえまぎれても、たいてい困らないじゃないかという反論が当然出てく

る。「辞典／事典」「成育／生育」「格差／較差」「禁漁／禁猟」なども同様である。まぎれたところで、コミュニケーションの上では、多くの場合、たいした支障にはならないと思われる。

すなわち、まぎれやすいということは、決して、まぎれた場合の支障の程度とは一致しない。意味の近いものは、まぎれやすいが、意味が近くなればなるほど支障の程度はすくなくなりそうだ。

それでは、これを、どのように処理して、「まぎれやすくもあり、かつ、支障の程度も無視できない」という一群の同音語を選び出すか、これが、これからのひとつの課題である。

同音語の中で、同音異義の場合だけが、特に問題にされるのは、「意味の近いものは、たとえまぎれても、たいして支障にならない」という前提に立っているからに違いない。わたくしも、(II)のはじめに「PとP'のあいだには、無視できないほど大きな意味の違いがあったとしよう」と規定した。が、この「無視できない」という線を、どのようにして引くかである。

それは、結局、ひと組ひと組の同音語について、それがまぎれた場合の損失を、わり出していく以外にない。それにしても、どのような面から、いかにして損失を求めていくかが、問題である。そして、そのひとつのヒントは、意味のへだたりにほかならないのではないかと思う。

注2 まぎれやすいので有名な同音語は、かえって、それがトレード・マークになっているために、判別しやすかった事実がある。たとえば、「市立／私立」「化学／科学」のような有名な同音語は、この語を用いる場合にすぐ、こうした同音語セットが頭にうかんできて「イチリツ」とか「サイエンス」のカガ

ク」とかいうように、まぎれないような手だてを施しやすい。これは、カナテライプを使用している人びとの間では、かなり一般的な常識のようである。彼等は「ケンガイニサル」なごうい語を打つと、すぐに「ケンガイ」に注をつけて「県外」か「圏外」かを区別させる。

このような場合、まぎれやすい同音語として、有名なものや使用頻度の高い同音語は、発信の場合も、受信の場合も、すぐ、その同音語がセットとして頭に浮かぶので扱いやすい、かえて思いがけない語「土壌」と「泥鰌」とか「日航」と「日光」などで失敗するという。

## V

「同音語なんかたいした問題じゃない。文脈で、たいていわかる」というようなこともよく言われる。この場合の「文脈」とは、いったい、どんなものなのだろう。わたくしは、これは、どうやら、その語の前後に、縁のある語が出るかどうかということをしてさしているのではないかと見当をつけている。

もちろん、文章や語線全体をつらぬく論理的あるいは感情的脈絡が、同音語の判別に役立つことは否定しえない。が、このようなものを、判別の手がかりと認めて、どういじりまわしてみても、実際的な効果は、ほとんど期待できないのではあるまいか。やはり判別の手がかりと認める以上、その語を中心として、第一次的にかんがえられる範囲の文脈・語線ということになる。また実際に同音語の判別をめぐって、文脈というものが云々される場合も、そうだろうと考えている。

そこで、その語を中心として第一次的に考えられる範囲の文脈というものの中で、その語から直接、想定しうる判別条件——アクセント・品詞性・慣用的な用法・複合語形——をのぞくと、さきにくべた「縁のある語」が、ひとつの判別の手がかりとして浮びあがってくる。

「切手をシューシューする」(収集)

「混乱をシューシューする」(收拾)

「カンジョーを害する」(感情)

「カンジョーを誤まる」(勘定)

の「切手」「混乱」「害する」「誤まる」が、その例である。

これが、もっとも単純な形であられるのが、語の並立である。たとえば、

「ソーイ・工夫」(創意/総意/相違)

「キカク・立案」(企画/規格)

「興味とカンシンがある」(関心/感心/寒心)

から「創意」「企画」「関心」が判別できるのは、その前後の「縁のある語」のおかげだろう。

国研報告二〇の「V・三・テライプ資料の収集および分析」には、こうした実例が数多く見られるが、このテライプ資料の分析の際の、ごく小規模な調査では、こうした「縁のある語」が判別の手がかりになりうるかどうかには、著しい個人差があった。ということは、個人個人の知識・経験によって、ある人には「縁のある語」として判別の手がかりになりうるものが、他の人には、まったく手がかりにならないということである。

たとえば、



「東京の築地地区では、きょうからチューシャが、制限されま  
す」

「カンチョーの季節をむかえて、鳴門には大勢の人々が集まって  
きました」

で、「築地」や「鳴門」を手がかりに「駐車／注射」「観潮／干  
潮」の中から「駐車」「観潮」を選び出せるかどうかは、もはや、  
言語的な知識・経験では、ありえない。

「政府・ガツカイ・民間の代表八氏」

「他国のカンジョー・脅威・攻撃を排する」

などで「学会」を「学界」と、「干渉」を「感傷」「鑑賞」などと  
区別する際にも、言語以外の経験が大きく影響する。

しかし、ともかく、こうした「縁のある語」というものは、同音  
語の判別にかなり有力な手がかりになりうる。国研報告二〇の調査  
でも、その語の前か後に、「縁のある語」を配すると、単に品詞性  
や慣用的な用法・複合語形だけの判別条件の場合よりも、さらに判  
別が容易になることが明らかにされている。具体的にテスト結果を  
引用すると、五三・三％だったものが、縁のある語を配することに  
よって、総解答数の六四・八％が正解に到達している（同書・一〇  
五ページ）。

それなら、「縁のある語」をなるべく出す、それも、なるべくそ  
の語よりも前に出して文を組みたてた方が、同音語の混乱をさける  
うえて賢明だ、ということが、当然予想されるわけである。しか  
し、同音語のひとつと組むについて、どんな語が、判別の手がかり  
となりやすい「縁のある語」であるか、それを推定することは、き  
わめてむずかしい。

もうひとつ、文脈上の、というよりも構文上の手がかりとして  
は、格関係がある。言うまでもなく、どんな格に立ちうるかとい  
うこと、どんな格をとりうるかということである。

イチドーに集める。

イチドーを集める。

東大でコーギする。

東大にコーギする。

言うまでもなく、こうした手がかりが成り立ちうる同音語は、そ  
う多くはあるまい。しかし、これならば、各組の同音語について、  
ある程度、想定していくことが不可能ではないように思う。そうす  
れば、こうした面からも、まぎれやすいものと、まぎれにくいもの  
との予想がたてられるのではないかと考えている。

## 六

以上のほか、どんな人が、どんなところで、どんな話題で述べた  
話かによって、言いかえれば、場面とか相手とか話題によって同音  
語の判別ができることもないではない。

最初に挙げたA3「午後からコーニンに行きます」は、この例で  
ある。

しかし、こればかりは、判別条件のひとつに数えあげてみたところ  
で、実際の判別に役立つような形に操作しようにも、ちょっと方  
法がないように思われる。

ただ、速記をする人が、よくやるように、造船技師の話だから、  
この「ゲンソク」は「原則」ではなくて「舷側」のことだろうと  
か、天気についての話だから「指定」ではなくて「視程」のことだ

ろうというような、言わば、その語の使われる職業分野を考えてみることは、ある程度役立ちそうに思う。各組の同音語の中で、特定の職業分野・専門領域で使われるものについては、その分野・領域を明らかにしておく。そうすれば、その語が、どんな場面で使われやすいかがわかると同時に、同じ分野・領域に出て来そうな同音語があれば、それは、同じ場面で、あるいは、同じ話題に使われる可能性がよいから、まぎれやすいのではないかと推定することができる。たとえば「斜交（数学）／斜航（数学）」や「端柱（工学）／短柱（工学）」はまぎれやすいが、「水孔（植物）／水衡（鉱物）」とか「筋腫（医学）／金朱（工芸）」とかは区別できるのではないかというわけである。これは結局、すでに（Ⅳ）で述べたことと同じ問題だが、専門語の場合には、特に、話の場面や話題に結びついて現われやすいので、こうした同音語については右のような処理が効果をあげると思われる。

### おわりに

同音語として、もっとも話題になる「字音語の同音語」を例にしつつ、同音語をめぐるいくつかの点について述べてみたが、類音語の問題、同音複合語のこと、あるいは外来語や和語での同音語問題等、まだまだ多くの問題がある。

また、同音語そのものが発生するメカニズムといったような問題もあるが、これについては、水谷静夫氏が「同音異義語（言語生活・八一号所収）」で述べておられる。

この水谷氏の論からは、他の点でも多くの教えをうけた。